

---

# 歌う召喚術士

アニキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

歌う召喚術士

### 【Nコード】

N6195Z

### 【作者名】

アニキ

### 【あらすじ】

魔法と科学が当たり前にある時代

ふいに過去が「観え」てしまう少女メルは高校入学数日前から不思議な「過去夢」を観るようになる  
見知らぬはずだが、どこか懐かしい感じのする少年が歌を歌っている夢

これが誰の「過去」かわからぬまま、メルは入学式を迎える  
そしてメルは「彼」と出会う

## プロローグ

声が聞こえる

それはきつとあの子の声  
それはきつとみんなの声

みんな期待に胸を躍らせながら、笑顔であの子が始めるのを待っている

あの子はみんなに笑顔を振りまきながらゆっくり息を吸う

息を吸う音を聞き、みんな話すのをやめあの子に注目する

そしてあの子は静かに歌い始める

力強く、それでいて繊細な歌声

まだ変声期を迎えていないであろうその声は、時にはソプラノ歌手にも劣らない高音を紡ぐ

それを聞きながら私は、この時が永遠に続けばいいなと思った・・・

ケータイのアラームで目が覚めた私はさっきまで「観て」いた夢を思い出す。

どこか知らない森の開けた場所で少年と少年を囲むように座る人々  
少年は笑いながら歌を歌い始める

周りの人たちも笑顔でそれを聞いている

これ自体はなんの問題もない光景だ。

夢なのだから突拍子のない状況でも領ける。

だが、そんな夢でも数日連続で見れば確実におかしいことに気付く。  
これはただの夢ではなくきつと誰かの「過去」なんだろう。

私は生まれながらに「過去」を「観る」力がある。

別に変な話ではなくこの世界には魔法が実在する。

魔法は適性がある者なら努力次第で誰でも使えるようになる。

覚える早さや力に違いがあつたとしても確実に習得可能だ。そして  
適性のある人の中には「潜在魔法」と呼ばれる先天的に魔法を身に  
付けている人がいる。

私もその一人で、ふとしたきっかけで「過去」を「観て」しまうの  
だ。

ここ数日「観る」夢もおそらく誰かの「過去」だと思う。

予知夢ならぬ「過去夢」

「過去夢」自体は別に不思議ではないが同じ夢を連続で観るのはこ  
れが初めての事だ。

そして何より不思議なのは「過去夢」のはずなのにこの夢にはおかしい所があるということだ。

少年の歌はすぐく素敵だったがそこはへんじゃない。

森も場所はわからないが普通。

おかしいのは少年を囲んでいた人々だ。なぜならあの人たちには・

・

「メルー！！朝ご飯出来たわよー！！起きなさい！！」

夢の内容を思い返すのに時間をかけ過ぎたようでお母さんが一階から私を呼んでいる。

「今行くー！！」と私も言い返してリビングに行った。

今日の朝食はトーストとソーセージと目玉焼きと言うオーソドックスなものだが朝の定番とも言えるこれらを食べながら今日入学する学校のことを考えていた。私が通う私立サクラザ力魔法学院は私達の住む国ウィンバードの中でも「ブルー」の称号を持つ魔法学校だ。この国には優秀な人材や功績を残した人物を多く送り出した機関にはクリスタルが贈られる。その中でもブルークリスタルは国の色である青を使っていることもあり、何よりも高い評価だと言える。

この学院は初等部からのエスカレーター方式でかつ、飛び級も出来るので実力のあるものはあつという間に卒業ができ、それが出来なくても試験をクリアすれば淡々とあがって行くのであるとは勝手に卒業になるのである。

小さな頃から魔法に慣れ親しめば自ずと魔法もうまくなり卒業時に

は即戦力になると言うわけだ。他の学校に飛び級はなくエスカレーター方式でもサクラザカ学院ほどうい人材を送り出せていないので客観的に見てもブルークリスタルを貰えるのは当然である。

そんな学校に私は受験し、見事合格（試験は魔法適性だけなので適性さえあれば誰でも入れる）し余裕ぶっていた私は学校の規則に「在学中に試験に落ちると即退学」と言う無慈悲な条件を見て泣きながら全く知識のない魔法学の予習をここ数日やり込んでいた。

「・・・もしかしてあんな変な夢観たのは勉強のしすぎだったんじゃない・・・」

「夢？」

「ううん、何でもないの。」

私はトーストの最後の一口を食べながらサクラザカ学院の制服に着替えお母さんに「行ってきまーす」と言って家を出て駅へ向かい歩き出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6195z/>

---

歌う召喚術士

2011年12月20日22時56分発行